

タイムマシン欧州周航

北澤 義弘

泰西の旅を果しぬ冬座敷
雨もあがりて南天の紅

北澤 葭
草間 時彦

立冬の過ぎた木曜の午後私のヨーロッパの旅をテーマに葉山の茶寮で連句の会が張行された。右の発句と脇句で始まった。そこで歌仙は「泰西の旅」と題された。

出勝ちを争う四苦八苦も旅の重苦に比べれば氣樂なもの。捌き上手に導かれ三十六歌仙を巻きあげると酒肴も入って雑談となる。この度は当然私の旅の土産話に志向が集る。

「御旅行の目的は。」「何ぞ面白いことでも。」「旨いもの、うまい葡萄酒は。」等と矢つぎ早やの善意の質問やら意地の悪い誘導尋問に答えてゆくものまた楽しい。そんなやり取りの内にこの度の旅のまとめが自然と形を整えて来た。

恩師土居光知氏の「文学の伝統と交流」に範をとり、

イギリス文学形成までの過程を遡って、その一脈であるケルト文化の跡を民族の足跡の中に見てみたい。土居氏の場合は文字使用以後を中心としており文学そのものが取りあげられている。しかしケルト文化の場合は文字以前の部分と十世紀以後の文字による部分に分けて見なければならぬ。むしろ文字文化に表現されていない所が問題となる。故にケルト民族の生活と文化の観察が是非とも必要となってくる。

北の花ブラハ

そんな次第で平成五年初秋、ケルト発祥の源からブリテン諸島に至るまでをこの足で一通り体験することにした。彼らが数千年かけた行程を僅かの日時で辿ることができるのも文明開化のおかげである。秘書一名を伴って成田空港を午後六時に光波式タイムマシンで飛び立つ。成層圏の眠から眼が醒めるとも早やフランクフルトの早朝である。はやりの吉野屋の牛丼なみの速さと言えよう。税関を出ればそのまま鉄道の地下駅。両替の違もあらば

こそプラハ行のインター・コンチネンタル列車が到着。二人だけのコンパートメントに席を占めてこれでひとまずほっとする。秘書は女であるが小生も古稀を過ぎたので風紀上問題にされることもあるまい。こゝまで万事上首尾に運んだのを祝い車内賣りのカートから赤葡萄酒を一本求めて車窓の景色を肴にちびちび始めた。

機関車はディーゼル。それにしても速い。揺れもなくどこまでも眞平らな沃野を東進する。窓から見える作物は玉蜀黍に麦と薯。その間に時々見える黄色い斑は甜菜畑であらう。通りぬける林は赤松の美林で日本で見ると同属のようだ。雑木林はプラタナス、アカシヤ、樺、榎など。何れも直径一尺以上もある大木と言うのが日本で見ると森の印象とは大違いである。

ニュールンベルグでやゝ長い停車があつたが定刻発車する。

東進するにつれなだらかな丘が増えて来る。遠方に山嶽の形が見えはじめる。ドイツの外れに近付いた模様。美事な水田と言いたい様な緑の平面はよくよくみれば草の原。その所々に丸く巻きあげた大きな干草の団塊がごろ／＼と転っている。水田と牧草地の違いが日本と西洋の本質的な違いであるとかよく理解できた。丘の麓には白壁赤瓦の農家が集落を造っている。列車はやがて山の勾配にさしかゝる。針葉樹林の黒々とした森が列車の両側

に聳っている。樅や唐松の大木。日本の松と同属のサイラスも混じっていた。針葉樹林は深山の趣を與える。

ボヘミアン・フォレストを走っているのだろうか。溪谷やトンネルを抜け列車はさらに勾配を上る。車輪の苦渋する音がスパゲッティ／＼スパゲッティ／＼と言っているのめさすがヨーロッパの列車。上り切った峠はチェコとの国境らしい。兵士によるビザとパスポートの簡単な査察があり、小憩していた。車窓から外を見てすぐ眼にとまったのは下に動きまわっている駅員達の容貌である。これまで見てきたドイツ人とは確かに違った顔付。スラブカトルコ人の面相と言つたらよいか。国境という觀念の線一本でこんなに顔付が違ふのに地続きの国々の民族住み分けの微妙さを感じた。東洋人ではないが今まで見てきた西洋人でもない。やはりチェコ人は東欧なんだと不得要領に納得した。話している言葉も別系統である。

黄ばみかけた白樺や榛、枌の雑木林を抜けてゆく。車の響が変化した。今度はグラタン／＼グラタン／＼。下り坂だ。珍しいドーム形でマラカイトグリーン屋根を被り黄色の壁面に囲まれたプルゼン駅に着いた。駅名の看板の綴字からはあの日本でも有名なピルゼンビールが咄嗟に思ひ出せなかつた。窓外に見る町の建築物の趣きはドイツ領の場合と著しく異っている。ドイツの方は鋭角三角形の直線的な尖塔をもつ教會の黒い屋根と白壁が

主流であったが、チェコの教會の屋根は大抵丸いドーム形を上に着き、壁は黄土色である。かつてトルコで見た寺院に似た感觸だ。ビザンツの系列なのであらう。民家は赤瓦と黄壁の澁い色彩をもつ上に、赤煉瓦を積みあげた四角く高い煙突が各戸に立っている。どれも古びて煤けている。珍しく思つて走る列車から眺めているとその中の一本の煙突が今にも折れんばかりに「くの字」型にへし曲がつていた。「あれでよく崩れ落ちないな。」とくと見詰めるとその天辺に細長い四本の脚とその上に二体の大きな羽毛の丸い塊があるではないか。瞬間幼時にみた絵本の図がひらめいた。赤ちゃんは鶴が運んで来ると言ふ西洋の言い伝えに守られそれはこのあたりでも大事にされてきたのであらう。あの光景と感動はこの旅の間中脳裏から離れなかつた。古今の詩人は旅に心を魅了せたとはいよく聞く話である。丹頂鶴の孤高に比べてずっと里心を抱かせる鶴である。寫眞に撮りそこなつたのかへつて幸ひしたと思つている。この様な自然に恵まれているボヘミヤは多くの民芸・藝術家を育んできたのはうなづかれる。ボヘミアンとはその代名詞となつてゐる。豊かに流れるペロウソカ川の岸辺や澁みでは青年達がテントを張り舟遊びをしている光景がしばしば見られた。列車は山合いから町の点在する広い所に出了たと思つたらもう塔の林立するプラハの市街に入つて行つた。夕方六

時少し前に列車は停る。約九時間の鉄道の旅は怠屈するどころか幾多の印象を頭に刻み込んでくれた。

プラハ本駅の巨大なドームの中に降り立つと、その内側は總て赤い壁面に囲まれてゐるのに奇異な感を受ける。

市街に出る。駅前には広い公園で樗の大木に囲まれてゐる。どうも見たことのあるような所だ。石造りの三、四階のビルディングの上は赤瓦が縁取り、更にその上には塔が突つ立つていて、丸いマラカイトグリーン帽子の屋根を二、三段重ねてゐるのがあるかと思えば、中にはぎざざのある屋根の先端が細い槍の穂状をなして天を突きまわつてゐるゴシック様式の壮大な寺院もある。それはティーン教会と教えられた。バロック様式であらうか、アーチ型の破風の頂上と左右の端に何か劇的な動作を現す石彫の人物像を据えた黄色い壁面の家。そのファサードの上部のアーチの部分は鮮かなコバルトブルーの空を背景にした寫実風のミカエルらしい天使を描いた壁画で飾られてゐる。その横の三階建の赤い屋根の周りも聖者の立像がぐるりととりまいてゐる。地震国日本では到底眞似られそうもない。下の通りの交錯するプラザにもところどころに青銅の像が故事を物語るように立っている。タクシーの運転手の得意げな説明によればその一つはヤン・フスと彼を取りまく信者達とのこと。その巨大さから考えても彼が如何に民衆の憧憬を受けてゐるか

が分る。その大きな構えの台座の石組みをぐるりと囲んで今や政治の桎梏から解放されたとりぐの服装の市民が屈託もなく腰を下している。石畳の上を歩きながらふと思ひ出したのはイタリアのフィレンツェの町であった。似ている、確かに似ている。そう言えばバスの中央駅から直行定期便がフィレンツェとの間を結んでいる。

よく考えればこれらの都市は十八世紀には共にオーストリア、ハプスブルグ家の領土に属していたではないか。地図でみてもチェコとイタリアは意外に距離が近く、昔からアルプスの東廻りで往来し易かったのだらう。それを思えば紀元前後のローマ時代からケルト人やゴート族の移動に神経質だったローマ人の心情がよく理解できる。

かつて文人D・H・ローレンスはその小説「アーロンズ・ロッド」の中でフィレンツェの町の美しさを譬え、それを「最初に見付けた南の花」と稱している。これに因んで私はプラハの町を「こゝにも咲いてた北の花」と呼びたい気分である。とすれば市の中を貫流するウルタヴァ川はアルノ川に当るわけだ。川向うは西にせり上ってボヘミヤの山地に連らなつてゆく。従つてプラハは東の平地を扼する要所と言うことになる。こゝにプラハ城があるのは当然である。既に紀元前八百年からケルト人達の発生した地帯とも推定されており、附近からはその遺物の出土が多い。このプラハの国立美術館にもケルト人の

作つた有名な後頭部を共有した左右を向く二つの顔の石彫が保存されている。ピカソの立体図の元祖とも言えよう。ヨーロッパ全地図を見れば判るようにプラハはその中央に位置しているので、古来人間を含めて動物達の移動の交叉点に当たっている。それらの生活にとってエコロギー上から見てもその必然性を孕んでいる地域である。ボヘミヤの森は人獸共に蛸集した所だった。それだけに歴史的には民族篡奪の標的にされたのも頷ける。

太古の頃人類のヨーロッパに拡散していった情態の推理は人類学、民族学、考古学の成果に頼る以外にはあるまい。未だ不明な箇所の方が多い。しかしそれは諸科学の発達のお蔭で徐々に埋められてゆくのだらう。昨十一月九日の新聞にもシリヤの洞穴からプレクローマニヨン人の幼児のはば完全な遺骨発見の記事があった。半年前にはアルプスの氷河の中から古代人の遺体も発見されている。

プラハから東南百軒あたりのボヘミヤ・モラビアン高地をバスで越えたとブルノを中心とする盆地に達するが、その間は起伏が多いとは言え概ね平坦だ。手入れのようく行き届いた赤松林や玉蜀黍畑が続き、この国民の活力が伺はれる。廣いハイウェイはバスの旅を快適にしてくれる。更に東漸南下を續けると八十軒程でカルパチヤの山脈の外れに行くてを遮ぎられる。大体このあたりまで

がボヘミヤ人の範圍である。山と平地のバランスよく、水量豊かな緩流にめぐまれている。色々な人種が住み着いていたのは頷ける。銀、銅の鉱物資源が多いのは地下に火山脈が来ているからである。

紀元前一八〇〇年頃、このあたりはアウンシエティツ文化に属しており、そのインド・ゲルマン系民族からウエネティ、イリユリア、ケルト人等が分れたと推定されている。ケルト人と言う呼稱はアルプスの北廻りの民族を指し、他の二つは南下してバルカンとイタリーへ向かった民族である。何れにせよこゝらが原ケルトの居住地であった。

デュナイ川下り

カルパチアの西端の山地をぬけ、下方に平地が開けたと思う間もなく赤瓦揖黄壁の家が立てこみはじめバスは大きな都市に入ったことを知る。何となく濕っぽくなった感じがしてくる。ブルノから一時間半以上経ったことから見てこれは間違いなくブラチスラヴァである。眼の前にぱっと青く横に広がる水面。つひに見たぞ、美しいドナウ。子供の頃からよく知っていたドナウ川に今はじめてまみえたのだ。窓の右手の丘の上に大きな正方形の石の城がずっしり構えている。威厳に満ちた風格。まさに旅は感動の連続である。

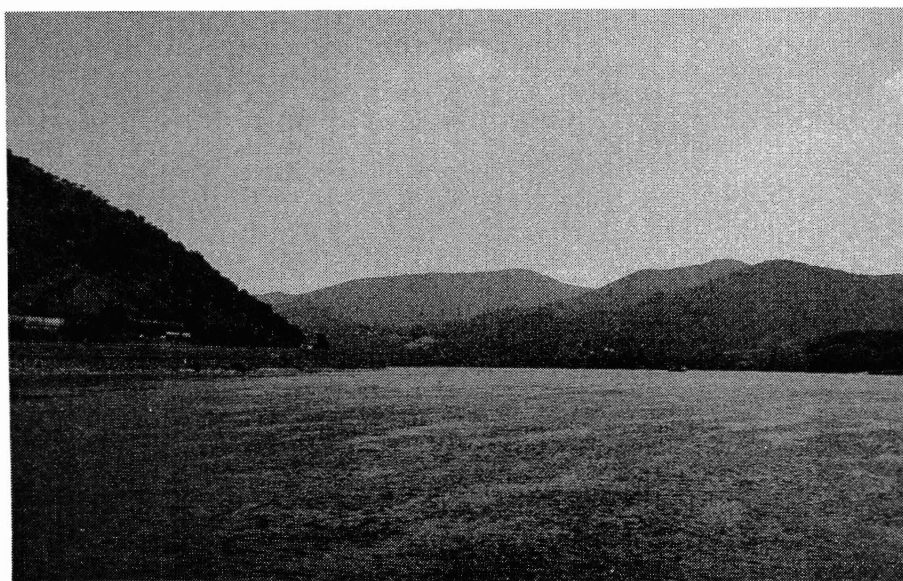
チェコと分離したばかりの所為か、このスロバキヤで

は新都市計画が大規範に進められているところである。タクシーで可成り走った所にホテルがあった。ここで旅寝の假枕を取る。あたりにはまだ野趣が漂っている。周囲の広場には日本と全く同じ背丈のアカザ、黄色い菊形の小花をつけたアキノノゲシ、ピンクの粟粒の花を冠にしたシモツケソウ、ブルーの小花を点々と散らしている釣鐘人蓼などが空地を埋めており、石組みの間をはい柏槓が覆っている。日本の新開地とよく似た風景だった。

ドナウ川はドイツ語、英語ではダニューブだがこゝではスロバキヤ語でデュナイと呼ぶ。ハンガリーに入るとデュナである。オソヴニの棧橋からブダベスト行きの船に乗る。すぐ上流にはモダンなモストSNPという名の巨大な吊り橋が川を横切り、屋根の隅々に赤い角のような櫓を構えたいかついブラチスラヴァ城が我々を睨みつけている。ドナウ川邊の守りは堅い。旅客は税関の構内を通って一應の検査を受けるようになっていく。水色の川面を背景にゲート柵の前に立っているのは白いブラウスと青いショートスカートの姿の颯爽とした金髪の麗人、不覚にも私はボディチェックと言ふのをこの役人にしてもらいたい衝動を感じた。我が秘書も気付いて旅の記念にとすかさずカメラのシャッターを切ったほどである。たしかオリンピックにチャラフスカというこの国の体操選手でよく似た人がいたことを思い出す。ボヘミヤは

立去る時まで血を騒がせる。船出にもはずみがつき、重いトランクも軽々と美しい白塗りの船の人となる。舷窓から対岸の方を見渡す。数羽の白鳥が水面に浮かんでいるのに気付く。今は現となった憧れのダニューヴが漣を立てて眼前に光っている。川幅は六、七百メートル位。岸辺が緑に縁取られた青きデュナイの水を白く掻き立て、船は栈橋を後にした。

面舵いっぱいたちまち川の真中に出る。赤と白のブイの濡標に沿って船はスピードをあげる。百人定員のトラグフレーゲル船CSPD流星型はその名の如く音もなく川面を滑りだす。進路ぞいの鷗が舞ひ上り、白鳥は岸寄りに身をよける。スターボードサイドはオーストリア領から程なくハンガリー領へ、ポートサイドはスロバキヤ側である。切れ／＼の緑のラインは大きなごろ太石の白い岸邊に継がれ、それが時に細かい砂の白洲に変ずる。流れの向きの微妙さを知る。その配置は左岸右岸で反対に補ひ合っている。巨茨や鈴懸、菩提樹の大木の前面には白楊、泥柳のポプラ類が乙女心のように白い裏葉を震はせており、水の中まで侵入している叢林は川柳、行李柳などの柳属である。そんな水辺低木の周りには蘆葭がしっかり根元からんでいる。岸の前面に島もある。裏側は多分澱みか入江であらう。大きな澱みには浮島ができているかも知れない。石器時代の若いカップル



ドナウ ベントの上流を望む 左の山の裏がブラチスラヴァ

にはお誂えのラブネスト。川岸の線の模糊たる所は支流がこの本流に合流する箇所と見られる。可成り大きな合流点も多い。この川を上流に向かって旅した場合そんな所では古代人は道探しに大いに困惑したことだらう。川辺を住み家として、渡しや水先案内を生業とする部族がその頃もきつと居た筈だ。洒落でもないがコマルノの町あたりまでは兩岸の土手は眞平らだから陸路の旅人はこの辺のいくつもの複雑な流入には目標を失ひ、川辺の部族のお蔭を被つたに違いない。岸が急に右岸から行く手を遮ぎって来る。何やら人工的な埋立てによるらしい。

左岸からも同様な突堤が迫ってくる。と見る間に船は速度をゆるめ、コンクリートの岸壁にそってゆく。正面には鉄の柱が聳えている。閘門と言うやつだ。但しヨーロッパの各地にあるものよりは格段に大きい。ドウナキリティダムである。他にも二艘ばかり並んでいる。水門の後方の扉が閉され、みる／＼水位が下ってゆく。可成り短時間で壁は約三十米の高さになった。船旅の單調を破る面白いハブニングであった。聞けば他にも二箇所閘門の計画もあったようだが、隣接両国民のエコロジー保全の民衆運動がダム計画をやめさせたとのこと。東欧諸国の政治路線変革がもたらした最初の成果であった。閘門で位置を下げ漸く航行する。左前方に高い山脈ニッケ・タトリやスロベンスク・ルドーリイの峰々を望みはじめ、右

手にはハンガリーの丘が勃起してくる。山の走行する形は川沿ひの路程を知るよすがとなったことであらう。右手から大きな丘陵が船の正面を遮ぎりはじめる。舵が左に廻り出したことはこの船の航跡が示している。「いよいよドナウ ベントだな。」と独りごつ。船客達も右へ左へと移動してカメラのシャッターを切っている。コヴァンヴォスの山々がもつと力強く左から通せん坊を仕掛けてくる。川に添った山裾の灰色の絶壁が岩膚もあらわに堅固な弓手の控えをなしている。当然今度は船も右に向いている筈だ。馬手の丘も大きくのし掛かってくる。見ればその頂上には城砦が下を睥睨している。このピリス山頂は古今にわたり重要な地点であったことを明かに示している。こんな曲折を数回繰り返えす。右岸に大きな町が見える。エステルゴムと川岸の標示板に大書してあった。やがて左岸の町ヴァーツ。完全にハンガリー領に入った。同時に名立たるドナウ ベントも兼ねて通り過ぎ、一段と偉容をそえて南に悠然と流れる川の上を船はベストを指して滑走して行った。

ハンガリアン ラブソディ

栈橋に近づく頃左岸に沿って白亜の殿堂が稟々しく我等を迎えてくれる。こゝの絵葉書には何れもこの横長なネオゴチック様式の国会議事堂をブダペストの象徴として寫している。船の美しいおんなクラークが船から電話

で予約してくれたエルジェベート橋^{ブリッ}通りにある石造りの古風なホテルに旅装を解いた。やゝ角型の顔に口髭をたくわえ鼻の立派な中年の支配人がごつごつした英語で親切に説明してくれた。マジヤール人とはこのような顔付なのだらうか。頭は黒の白髪で眼は褐色系であった。

ホテルを出て車輛の控惚絶えまないエルジェベート橋前の大通りを地下道で渡るとベストの繁華街ヴァーツイ通りに入る。カラフルな看板、日除けテント、旗指物。それを縫って歩く観光客達の波。蠢めく市^{いち}なか。その色

合は赤、白、緑。商品は民芸品、雑貨、衣服、本、食品程度の一、二次産品である。人目をひくのはハンガリー刺繡。白生地に赤、緑、紫、黄色と派手な色調の糸で花柄が細かく手ぎれいに刺してある。黒地に赤、白、黄色で花をステッチしたフォークダンス用のチョッキやスカートはエキゾチックだ。土産店の、頤^{おとがい}や肩先を細身に削って川連系^{かわづら}こけしに似た形の土偶も民族色がある。土偶の女は花と花瓶、男は大きな鮭を二匹ぶら下げているのもユーモラスだ。櫛^{オシ}をたつぷり使った柱と扉で入口をしつらえた古風なレストランの店前^{さき}に横綱曙大の張り子の男の立像。その朴訥な容貌はハンガリー人の典型的な顔^{フェイス}付なのだらうか。大きな捏ね鉢を抱え片手で何か捏ねているところ。白いベーカーズキャップとエプロンを付けている。その白衣全体に細い赤線の大きな格子模様^{チェツク}が施さ

れ、裾には太い緑の二本の横筋の柄と言うのはやはり民族衣装と言へる。下町の雑踏をぬけて左手に曲るとデュナ川である。両側に厳めしく睨^{にら}んでいる口をあけた二頭のライオン像の間を通ると中に凱旋門を二つ構えた美しいセーチェニ橋にさしかゝる。川向うのブダ側のクラーク・アダム公園の上が王宮となっている。こちらは高台なので古来の砦^{フォート}や要塞、高級住宅などが集まっている。

「王宮の丘」の名所「漁夫の砦^{フィッシャー}」はネオ・ロマネスクの白い尖り帽子型建築の砦^{フォート}。この石垣^{かき}から東を見晴らした眺望はまさに雄渾そのものであった。この石垣にもたれて上流の方を見ると眼下には町に締めた青いデュナ川の帯が北から南にわたっている。左手は先に通過して来たピリス山とコヴァンヴォス山の間を迂曲し遠くウィーソンの彼方まで遡る。右手は遙かパンノニヤの大平野を下してユーゴスラビヤに入り、ベオグラード方面に左曲、トランシルヴァニア^{アイアンゲート}ン、アルプスの鉄門^{アイアンゲート}を抜けてワラクの低地を潤し、終には黒海に流れ込んでゆく。ヨーロッパの東半分を横に二折した形である。

正面遙かに霞んで浮ぶ山並は標高二千五百メートル級のトランシルバニヤン山脈。それを越えたウクライナ、キルギス大草原地帯を東にジェット機で僅か三・四時間程行つた所が天山・アルタイ山脈、東方の壁となる。再び左手デュナの彼方を望めば川向ふのカルパチヤ山脈が

パンノニヤ平原の北を塞いでいる。城砦の後方、ブタの西にはバコニの山森が迫っている。地勢はまるで東南のデユナ川下の低地に向かつて漏斗の口を開いた形に思はれる。西北進する動物群をすべてこゝに吸い込むためのグローバルな罠である。

蒙古やトルコ系のウラル・アルタイ遊牧民が中央アジアの北から西に侵入して来たのは前三〇〇〇年頃であった。その一部は南下し、コーカサスでインド・ゲルマン語族と接触した。クルガン族がそれである。既に南にはシュメール文明について古代エジプト文明、印度文明が花を咲かせ、中国の黄河には灰陶文明も開いていた頃のことである。やがて前一八〇〇年頃になるとインド・ゲルマン語系と考えられている中央アジアの遊牧スキタイ人がそれら先進文明を取り入れた独特のスキタイ文化をもって原ケルト人に接することになる。その原ケルトはスキタイ人から特に馬と鉄に関する技術を得てこのパンノニヤからボヘミヤ一带にアウンイェティツ文化を築いた。原ケルトはこゝからアルプス北廻り、イタリア方面、バルカン方面と三方に分かれてケルト的な行動をとっていた。

一方蒙古、トルコの混合文化をもったクルガン（高塚墳）人はずっと以前に北上し、ユーラシアの平原をバルチック海に向う。もう一つの流れは、ジーン・アウル作

の小説中のヒロイン、エイラの通った筈の、鉄門をくぐってパンノニヤからドナウを遡る経路をたどり、ヨーロッパの中央山道を西ヨーロッパに向っていた。フランス沿岸やブリテン諸島、アイルランドに巨石文化を築いたと思はれる人々である。それらの道筋はクルガン人やケルト人だけのものではなく、幾重にも、何代にもわたる人類に利用されて来たことを忘れてはならないと思う。ネアンデルタール人、クローマニヨン人、それ以後の古代人は何れも地球上最も容易な通路としてこの道を辿って来た。ドナウ川沿ひにはそんな中・新石器時代人達の遺跡が上流にかけて各国政府の保護の下に多く現存している。ペストにある国立博物館はネオクラシックの堂々たる白いギリシャ風な建物だが、その内容もそれに劣らず充実、この国全体にわたる古代遺跡や遺物が一目で判る様に詳細な説明を加えて手際よく配列されている。この紀行文の内容もその知識を裏打ちとしている。

ブタの山の端のやゝ平らな台地、デユナ川の中洲の方向、のどかな初秋の陽を浴びて板葺の小屋がそれ／＼四五軒、古代人の住居と見まがうばかりに建っている。夕餉の仕度が炊煙を立てている。風もないので垂直に上る数條の紫の筋。傍の石段に腰を下し頰杖をついてのどかな景色に見とれているうちに深い睡魔に襲はれる。

「見てごらん、エイラ。アイベスクだ」ジョンダラー

は、すばしこくて美しい、山羊に似た動物を指さした。
……絶壁の高い岩棚に、ちょこんと立っている。

二人は頂上をきわめ、足を止めて見渡した。それは壮大な景観であった。

後方には、いま登ってきた樹林限界線から立ち上がる山が鮮明に見えた。……東には、下方の平原も見える。平原を横切るのは、のったりと流れる川だ。結んだりボンのよう。エイラは目を見張った。

母なる大河といえど、厳冬の山頂という地の利を得て見れば、ちよろちよろ流れる小川でしかない。……その上方にぬっとそびえ立つのは、氷の冠を頂いた輝く峰々である。

「ああ、ジョンダラー、どこより高い所にいるんだわ、あたしたち。こんなに高い頂上へ登ったの、はじめて。世界のとっぺんに立った気分！ それに、こんなに……こんなに、きれいだ。胸がどきどきする」

男は、女の驚異の表情に輝くひとみを見つめるうちに、劇的なパノラマに寄せる自身の熱い思いに純な女の興奮という油が注がれて、たったいまこの女がほしいという欲求に突き上げられた。

ジョンダラーのひとみは、このうえなく豊かな青さに輝き、一瞬、光に満ちた深く青い空のかげらを二つ空から盗みとり、それに愛と熱い希求を足したのかと、勘違いしそうだった。エイラは、その青いひとみに吸いこまれ、たとえようもない魅力のとりこになった。

自分が動いたという意識もないうちに、エイラは男の腕の中にいて、強い抱擁と男の情熱的に燃える唇が自分のに重ねられるのを感じていた。あたしの人生に、飲びが欠けることがないのだけは、たしか。二人は母なる女神の賜物を、間断なく分かち合い、大いに楽しむ。だがいまの瞬間は、いつもとはかなり異なる。このちがいは、愛の行為の舞台のせいかもしれない。

エイラは官能の刺激をいちいち、高揚した気分を意識した。男の身体とすきまなく接触したのを感じ、さざ波のような戦慄に身体を貫かれた。男の腕は脇を締めつけ、両手が背中であわさり、男の太股が自分の太股にびたりとつく。毛皮のほうを内側にした厚ぼったい冬のパーカを通してさえ、それはわかる、股間の膨張の、熱い感触。重ねられた唇が、いわくいいがたい欲求をうねり上げる。ジョンダラー、どうか、止めないで。

ジョンダラーは、女の強烈な反応を察し、呼応して自

身の熱さも増すのを感じた。男のものは屹立し、張り脈打っていた。女の温かく滑らかな舌が、口に差しこまれたので、それを吸った。それから舌を放し、柔らかくて温かい女の口をさぐった。

すると、もういつぼうの入口の、ほんのり温かな塩気と潤いに満たされたひだの感触を賞味したいという、猛然たる欲求が湧いてくる。かといって、くちづけを止めるのもいやだ。女のすべてを、いちどきに味わえたいののに。

男は、女のレギンスを止めてある紐をほどいた。足元におろされ、脱がされるのがわかる。それから二人して女のパーカに横になり、男の両手は女の腰を、腹を、太股の内側を愛撫し続けた。女は愛撫に応じて、開いた。

男は、軽く触れただけで女があつというまに強烈に呼応したのを察知した。

ジョンダラーは、フリントの細工師としての訓練を受けた男だった。石から道具や狩りの武器を作る。道具師として、もつとも巧みな一人にあげられる。その理由は、繊細で微妙な石の多彩さに敏感だからだ。女たちは、繊細なフリント石のごとく、ジョンダラーの知覚とていねいな扱いに反応を示し、石であれ女であれ、ジョンダラー

の秘めたる最高の資質を引きだす。ジョンダラーは、器用な手で触れることによって、よいフリントからよい道具を作りだすし、成果を目で見てたしかめるのも、その同じ手で、女が最高に女らしさを高めていくのを感じるのも、心底好きだった。ジョンダラーは、この両方の技をみがくの、多大な時間を費やしてきたのである。

両手を使って、男は女のひだを開き分け、女そのものである美しい桃色の花に感嘆した。あらがいきれず、冷えつつある花弁を濡れた舌で温め、女をむさぼった。交互に襲う温もりと寒気に応じて、女の身体が震えた。はじめての感覚だった。いまだ男に味わわされたことなかったもの。

男は、山の頂上にしか吹かない風を、女に飲びをもたらす手だとして利用していたのだ。そして心のどこか奥で、女は驚嘆していた。

感じるのは、男の口に吸われていること、舌が這いずり、飲びの一点をつつくこと、巧みな指が奥へ達したところだけ、それからただ、内奥からうねりくる潮が高だかと波峰をもたげたとたん、崩れて身体じゅうを洗い流すことだけ。そのあいだに女は、男自身に手を伸べて、おのが泉に導き入れた。女が身体を押しつけると、男は女

を満たした。

男は、シャフトを深々と沈ませ、目を閉じ、女の温かく潤った抱擁に身をゆだねた。一瞬まをおいて、女の深い洞のへりに愛撫されつつ引き抜き、ふたたび押しこんだ。男は跳びこみ、退き、そのつど近づき、内なる切迫感が盛り上がる。

女のうめきを耳にし、腰がいよいよ上がるのを感じ、と思ったとき男は中にいて爆発し、飲びの波に続いて解放の波に洗われたのだった。

沈黙のなか、風だけが話していた。馬たちは、がまん強く待っていた。狼は興味深げに見つめていたが、好奇心をそれ以上の行動に移したいのをこらえるのは学習すみだ。

ついにジョンダラーは身を起こし、両腕について身体を支え、愛する女を見おろした。

.....

隣の尾根に辿りつくまでに、数日かかった。こちらの尾根のほうが低く、樹木限界線を少し越えるだけ。しかしこの尾根から、二人は、広々とした西方の草原^{ステップ}をはじめて見る事ができた。先ほど雪がばらついたが、さわやかに澄んだ日だった。遠方に、氷におおわれた高い山脈がかすかに見えた。眼下の平原には、南へ流れる川が見えるが、満々と水をたたえた湖に流れこんでいるよう

に見える。

「あれは、母なる大河なの？」

「いや。あれは妹川だ。あの川を渡らなければならない。こんどの旅で、もっとも厳しい渡河になるかもしれない。あつちを見てごらん。南のほう。川幅がぐんと広がって、まるで湖みたいだろ。あれが母なる大河だ。というか、妹川が大河に合流する所——合流しようとしている所だ。.....」

(筆者註 母なる大河はドナウ川、妹川はティサ川をさす)

得体の知れぬ刺激に驚かれて眼を覚ます。初秋の西日の意外な強さに顔は逆上せて赤らみ汗をびっしょりかいていた。何かタイムマシンに乗せられ、一万五千年も昔のこのパンノニアの地で当時の人達に會ってきたような気分であった。それにしても地上の自然は造化の神の御旨に叶ひ、鳥獸は豊に、植物は生ひ繁っていた。人々は心に従って自由に活動できた。手や指先を器用に使ひ、ジャスパーを探してはそれを打ち缺き道具を作っていた。指先の微妙な使用は頭脳の発達を促し、言葉の自由と相俟って感情は愛の域に昇華してきた。ネアンデルタール人とは雲泥の差である。彼等には愛欲ならぬ情欲しか考えられない。動物は周期的な発情期にたゞ本能に任せた交尾があるだけだ。人間だけが既にこの頃知性と感情を

働かせ納得行くまでの愛を持つことができた。そして愛の発現が性欲を契機としたことはこの一帯の旧石器時代遺跡から性器の土偶やヴィーナス像が多数出土することによって推測されよう。極彩色で精緻な博多交情人形などより素朴である。法や宗教の掟にまだ縛られていない古代人の愛情の表現は素直そのものと言へよう。時代が下るに従ひ性器や交情は神聖視され宗教に組み込まれてゆく。ジーン・アウルは私の夢の中でそれを訴えたかったのだらう。ケルト人の時代はその一万年後のことになる。有史以後では次第にタブー化され現代に至るが、十七世紀以降の科学の精神はまた性と愛について考え直さざるを得なくさせた。

苔の広場では黒と白の服を着た楽隊が管弦楽で民謡を奏で、二十人ほどの少女達が白地に色とりどりの花模様の刺繍のあるコスチュームで華やかなフォークダンスを踊っている。その情景を寫眞に納めて疲れた身体を宿まで引きづって戻った。夜食はホテルのレストラン。名物はパプリカの肉詰めテルテットなるものをエグリ・ピカヴェール、訳して「雄牛の血」と稱する眞赤なハンガリー・エルゲ産のワインで楽しんだ。サラダについてきたオークラに似た形状の白いパプリカのはのかな香りがばかに氣にいった。

ケレティ駅は古風で巨大な黄色の建物、威圧的である。

入口附近に柄の悪いのが十四・五人たむろしていた。早朝こゝからウィーン行き列車に乗り込む。きれいな車輛に坐っていたらそれは違うと言はれあわてゝ前方に移動する。同じ列車でも前部と後部で行先が違う。こちらはきたないので秘書は納得しない。隣りのコンパートメントの日本人女性の所にさっさと確めに行く。どうもこれではよいらしいと聞き不承無承に席に着く。たまに持った一等切符のプライドが原因のようだ。ヨーロッパの列車は何れも音なく発車する。日本の様に案内放送や発車ベルの騒ぎもないので少々気味が悪い。発車して程なくデュナの鉄橋を渡れば上り坂を越え、汚いとは言へ国際列車、続く限り平坦な高原の旅の路、西へ西へとひた走る。ときたま駅に停りはするがそれは丘と森合ひの美しい町々、やがて国境のシヨプロン着。この一帯は昔ケルトの據点だった所。ローマ時代から交通、防衛の要であったが、地形からみて当然である。そしてこの二十世紀末にあつてもまた世界歴史の大舞台となったことは記憶に新しい。一九八九年オーストリー境の鉄條網は切断され、その夏シヨプロン・ピクニックはこの地で行はれた。マジヤールの熱血がガダル・ヤイシュ宰相の英断により世界の大転回の機を把んだ。どつとなだれ込んだ千人の東独市民を黙って西側に押しやった。その通路がこのシヨプロンなのである。ベルリンの壁はこゝの一穴から崩壊していっ

たのだ。ハンガリーは魅力溢れる国、そして熱い血を秘めた民族である。右窓の地平線の縁にはまだ低いながら山並が現れはじめる。その向ふがドナウの川筋となっている筈。畑地は早や黄褐色、所々緑の林が畑を区画していた。三時間でウィーン^{ウィーン}西駅^{ウエストバインホフ}に列車は滑り込む。目的のハルシュタットの遺跡はもう間近だ。

ザルツカンマーゲート

三日は過ぎて早朝六時四十分ウィーン西駅発ザルツブルク行列車に乗り込んだ。線路はたちまち山地に入るがメルクから再びドナウの川に沿うが如くにリンツに向う。列車の両側から山が迫る。対岸はボヘミアン・フォレスト。一千メートル級の山脈。此岸はまだ小丘の段階であるが、奥には東アルプスのチロルの山を控えている。ドナウ川とはリンツで別れレールは西南方に向きを変える。今度はドナウの支流トラウン川沿ひに高原地帯を登って行く。進行の右手から急に迫ってくる山の麓を走ってやがて寒村の駅に停る。アッテナン・プッフハイム。急いで下車、山地を縫うローカル線二輛編成のスタインナッハイルドニンク行に飛び乗った。ぐん／＼高まる山に向ってつき進めば急に前が開け、青く静かに横たわるトラウン湖に出る。グムンデンと言うザルツカンマーゲートの町がある。湖の縁に沿って相ひに聳える山々の高さに驚きつゝ更に進むと、「バードイシュールで降りてバスに

乗り換えろ」と車掌が言う。一駅位先まで行ってまた列車、それから十分程行つて停つた所が遙々訪ねて来たハルシュタット駅だ。屋根もないプラットホームに降り立つと右下に石疊の小さな下り坂がある。荷を持って五分位とこ／＼歩く。眼の下に深い青緑色のハルシュタット湖がぱつと拡がって見える。世界一美しいと言はれている湖。四周の山の底に水をたゝえた姿である。一艘の連絡船が私達を待っていた。青い水面の対岸では濃緑の絶壁が行く手をさえ切っている。その水際に小さな黒屋根白壁の部落が崖にへばり付くようにつらなっていた。

湖岸ぞいに一本だけ道があり両側に家が立並んでいる。その真中程の所に広場があり、奥に大きな瀧が白い筋を引いている。脇に小綺麗な黄色の建物、それがケルト民族博物館である。源平の白と赤の旗を二枚縫い合せたような幟^{ノボリ}が玄関先に垂れ、路傍の石垣を眞赤な紫檀の実が一面に覆っている。

この館内にはハルシュタットの裏山ザルツベルクウェルクといふ塩鉱山から出土した初期鉄器時代の民族の遺物が保存されている。ケルト関係の書の挿絵によく使用されている種々^{いろいろ}な実物標本をこの眼で見た時は強く得心がいった。高さ一呎程の白い素焼に四本の棒色の横縞の入った水差^{ジャリ}、二呎位の丈の皮革の背負子^{しやいこ}と皮の三角帽、

經二呎のブロンズの大鍋、金屬の渦卷が二個連なつた飾りもの、鉄刀の柄に精巧な金の裝飾をほどこしたものの、青銅の首飾、腕輪、何れも特有の渦卷文様や鎖、鋌などで技巧がこらしてある。それから岩塩を掘る木のシャベルや掻き棒等の工具類も当時の人々の生活を生々しく思い起こさせる。

この塩鋌山に古代文化を發見したのはラムザウアーという名の鋌山支配人で一八四六年のことだったとのこと。それから急速にハルシュタット文化の名は古代史に躍り出たと言う。時代は前七〇〇年から前四五〇年と推定されている。

湖岸から屹立つ山腹を見上げると殆ど垂直にケーブル式の登山鉄道が通っている。途中一箇所だけ二本に分れてあとは一本の軌道である。不気味な思いをしながらも乗ってみる。八百三十メートルをぐいぐい昇る。それから多くの遺骨、遺品の出た古墳の点在する山毛櫟や松の鬱蒼とした山道を二軒程歩くと鋌山博物館がある。そこで上つ張りを借りて着る。坑口まで急坂を登ればそこに坑内トロッコが待っている。跨つてそれに乗る。狭い坑道は眞暗だ。軌動車は情容赦もなくごろ／＼音を立てゝ我々を奈落の果てまで引きずり込んでゆく。間隔を取つて照明がある。坑壁は総て岩塩のはず、壁を指で突ついて舐めてみる。たしかに塩鹹い。壁の色は赤、茶、黒、

灰、白色ととりどりだがこれみな岩塩。トロッコを下りると今度は跨座式の滑り台に腰掛けて一気に五十メートル程も滑降する。それを二回やらされる。初は怖がるがやれば意外に気持ちのよいもの。それから狭い坑内を可成りつれ廻される内に二・三十疊敷の地下大空洞に出る。そこは空洞一ぱい水を貯えて塩を溶解して流し出す作業場の跡なのだそうだ。今も底に少し水が溜つており地底湖状をなしている。向ふ岸に照明のやゝ強い所があり、ドリッド神官らしい像が祀つてある。ケルト時代の印象を見物人に与えるためであらう。更に坑道を昇り降りする。古代の坑内生活の仕掛け、塩堀りの実況を示す人形や道具立てがある。最後はそれを再びビデオで見せ説明もしてくれた。帰りは先刻のトロッコに跨つて上り坑外まで連れ出された。登山鉄道の駅まで歩いて下る。前のはるか下方にハルシュタット湖とそれを取りまいているチロルアルプスが古代の姿そのまゝに眼に映じた。湖はそれに囲まれてまるでサファイヤの様に照っていた。

ペランダが湖にせり出してゐるレストランで当地古来の名物をとシェフに押付け注文した。彼はしばらく考えていたが笑顔で厨房に入つて行つた。窓のふちにはプランターにピンクと白のゼラニウムが咲いている。俗な花だが外の湖と対岸の山の緑を背景にして如何にも可憐に見える。眼下の湖面には二・三羽の白鳥と鴨が数羽泳ぎ

まわっている。さて運ばれて来た御馳走はと見ると大きな皿にまん丸なお結び大の団子と菠薐草入りタリアテツレ。これではケルトの古代食だ。自ら新石器時代^{ネオリシック}人の心に氣を入れかえて転がらないように団子をフォークとナイフで先ず半分にした。それを細分し、さて口に入れれば何のことはないジャガ薯とメリケン粉と挽肉を混ぜ、油で練って蒸したものだ。まずくはないがとてもこんなに食べ切れない。その上この緑のタリアテツレの量と来る。これが昭和二十年だったら有難かったのにと悔やまれた。その名を問えばダムプリング。イギリスのマザーグースにもあるではないか。

Diddle,diddle,dumpling,my son John,

Went to bed with his trousers on;

One shoe off,and one shoe on,

Diddle,diddle,dumpling,my son John。

貧しい家の太っちょの坊やに幸あれかし。

ハルシュタットのケルト体験を終え、バスを使ってケルト人の墓が発見されたザルツカンマーグート地方の湖を廻る。軽井沢に似た保養地を脱けザルツブルクに着く。こゝも元はと言えばケルト族の開いた所、人類出現前一帯は大きな湖底だったと言う。ホーエンザルツブルク城の山からザルツアッハ川を隔てて遠望すればそんな過去から現在までが一度に眼前に髣髴として現れてくる。小

さいだけに宝石の様な町。人間文化の結晶体である。更にこゝからロマンチック街道にかけてケルトのラ・テーン時代の大規模な市街跡が次々に発見されている。それらの解明された暁には新たな人類文化史が構成されるであらう。

メランコリッシェ シュトラーセ

先はまだ長いので少々端折らねばと思ひつゝもこゝが十七世紀文化評論「麒麟」への義理と言ふもの。ミュンヘンに一泊取ったのはロマンチック街道の十七世紀をトロット調で膝繰らなめたのだ。

翌早朝、駅前から街道廻りのバスに乗る。客はおおかた日本人。大戦後の復興目覚ましいミュンヘンの郊外に出るとバスはアウトバーンを轟進する。名にし負う高速路から右にぬけると車はことごとフランケンヘアの谷間の街道を辿ることになる。

懐しのドナウ川にこゝでも再会の喜びを得られるとは思はなかった。渡るは川とも永遠の別れの憂さの泪橋。ドナウヴェルトの町に入る。ヴェルニッツ川がドナウと合流する交通の要地、千年の歴史を秘めたかつての自由都市である。町並みは鋭角三角形の赤瓦屋根が青空を鋸歯のように刻んでいる。金茶、白、黄の壁の家々、まるで嘶の国に迷ひ込んだようだ。古風を残す建物や狭い小径には、何か物言ひたげな表情がある。ヴェルニッツ川

に沿ってバスは上る。緑の山の鼻の上に赤い帽子の塔を構えるハー城の今は昔を秘めたまゝ、峠を蛇行して平地に入るとやたらに丈の高い塔を取りまく町である。ネルトリンゲンと言う。様式は同じでも新旧取りまぜた家並みを縫ってバスは城門をくぐり公園の前で止る。プラタナスやマロニエの太木の茂る葉蔭のレストランで食事を攝る。どこの町も窓毎にセラニウム、ペチュニヤなどの派手な花の咲きこぼれているプランターで飾っており、無理やりにも平和をと願っている心が痛いほど判る。町を城壁で完全に囲い、物見の塔から武士共の来襲に備えて来た十五世紀以来の長い苦難の歴史の町。中世の宗教、政治がらみの戦争、ことに悪名高い十七世紀の三十年戦争、デンマーク王クリスティアン四世のドイツ侵入によるヨーロッパの泥沼化。カトリック、新教、ハプスブルグ家、ボヘミヤ、イギリス、フランス、オランダと入り乱れての騒乱の眞只中に巻き込まれたのがこれらの町々とロマンチック街道筋の農民達。近くは一、二次世界大戦で再び地獄を味はった。思い起せばやり切れないメランコリッシュ シュトラッセではある。嘆いていても始まらぬ。先を急いでディンケルスビュール。手前の草地には歴史の消長も知らぬげに点々と茴香の繖形花序の白い花。その向うには石組みの円筒に赤瓦の円錐帽子を被せた塔が二、三本。ヨーロッパに円筒形が多いのは石組

み建築の所為である。白石塀の内側は大きな赤瓦屋根の家が建て込んでいる。三角形の広い破風は白壁に縦、横、斜めと黒い柱の綾が面白い。これを茅葺に直せばそのまゝ飛騨高山の合掌造りだ。合間からよつきり見える塔、尖った方錐形の屋根の上には十字架がある、丸帽のマライト色の方は物見櫓なのだらう。家の脇の石疊の路上を二頭引きの大きな乗り合幌馬車が歩いている。

馬車ならぬ我がバスはさすがに速い。フランケンヘアの山脈ぞひに街道の由緒深い城や町々をくねくねと廻って夕方近くにヴュルツブルグに到着した。

この駅の北側の丘一面を占める縦縞の畝の拡がりには葡萄畑と思はれる。そも／＼町は前一〇〇〇年にはケルト人が柵を築いた所とか。メイン川の東を扼するシュタインゲルヴァルトの山々を控え、西のライン溪谷に向う要衝である。ベルギー、フランスへ侵入する據点としては絶好の地だ。中、近世にかけて更に歴史の箔を付けたことは威厳に満ちた町の雰囲気から歴然である。こんな諸般の情況からみるとひよとして名立たる銘酒にありつくかも知れない。も早や暗くなりかけた人通りの少ない街を可成り探し歩くうち暗い露路脇にほんのりカンテラの灯を見る。殿めしい檜の扉の上に吊り看板がある。「一五七六年、ユリウス スピタル」。病院かと思つた。しかし上部にキングの透し彫り、下に葉のついた葡萄の

房の彫刻が付いている。おびえる秘書が「およしなさい。」と腕を引くのをふり切つて扉をそつと押して覗いた。中は三區画位に仕切られているレストランではないか。

中年の男が気さくに我々を奥の間に招き入れる。秘書はやむなくついて来る。部屋は可成り広く、ぶ厚い木のテーブルと椅子が並んでいた。直径四、五呎もあるワイン醸造用大樽の底部を環切りにした巨大な円盤が六個、壁掛け代りに左右の壁面を飾っている。太いくすんだ木の桁や梁が天井を支えており重厚な構えだ。斜め後の席には中年近い非ゲルマンの男女がさつきからワイングラスを傾けている。先の男がメニューを持って来る。そんなものには目もくれずに、「先ずビール。」と言った。「ない。」と言う。「ドイツに敬意を表して言ったのだ。では何を出す。」「ワイン。」と答える。では土地のやつをと注文した。それからやはり敬意を表してフランクフルトソーセージ。それにピフテキ一人前、たゞし焼く前にその肉を見せてくれと言った。男は引込むとやがて俵のようなシェフが肉を持って来た。肉は旨そうな色をしていたが分量に注文をつけた。日本人は小さいから日本人の尺度に合はせて少なく切ってくれと言った。黙っていれば草鞋の様に大きいを出される。それは承知した。だが持つて来た大きなワイングラスを持ち去らうとする。それは注文したのだからと言うと日本人に合はせて小さ

いグラスに取り替えると言う。私はむつとして「酒のメジャーは世界共通だ。」と言ひその大きなグラスに赤ワインを注がせる。彼もむつとしてそれに土地のフランクソワインをなみ／＼ついで行った。その赤い色合ひは好ましかった。ソーセージは実に美味であつたがドイツでは何んでも塩が強すぎると思う。

何時の間にか空席は中、高年のカップルで一ぱいになっていた。そこにひよろひよると花賣りの青年が入つてくる。テーブルの客は誰も知らん顔をしている。私の所にも来た。一度断つたが咄嗟に秘書にでもと思ひ直し、赤い薔薇を一本買った。すかさずライターの火で根焼をしてテーブルの花瓶に挿して「はい、君に。」と秘書の前に押しやった。すると、「何です。きざなことしないで。」と叱られてしまった。鼻白むとはこう言うことだ。ワインをかぶりと飲む。ふと横を向くと先に拒つた隣の客が薔薇を買っている。その隣りも。おやおや皆買っているではないか。老紳士と目が合った。ワインクされる。これから互いに話を交すことになった。非ゲルマン人は私のカメラで我々を撮ってくれた。秘書は仕方なくにつきりする。この男、しきりに日本のこと聞くのでフグ・ブロウフィッシュの話をしてやる。阪東三津五郎と言う有名な歌舞伎アクターが鯨に命を賭けた日本人のグルメ美談を一席。立派なステーキを運んで来た先刻のシェフも

珍しがって話に加わる。たいへん楽しい文化交流の場となった。帰り際には店の献立表と美しい案内書を土産にとくれ、店主夫妻まで見送りに来る始末。^{望再会。}聞けばこゝはケルトの昔からワインの名所だったのと。近くの山にケルト族の碧の遺跡がある。

ケルトの遺蹟の分布図に従い、翌日からライン川を下り始める。そして終にその一派ベルガエ族の昔の據点ブリュッセルに辿り着いた。これからフランスのブリタニウ地方にかけてはケルト文化の宝庫と言われている。そこにはクローマニヨン後の人間の心の歷程、エロスとクリスチャニティの和合を露わに表現した造形美術がふんだんに現存している。「ケルトの残照・堀淳一著・東京書籍」と言う本に出会ったが、これについて多くの妖しく美しい寫真と共に詳しい解説がある。それからオーステンデを出港、アルピヨン・ドーヴァまで二時間、翼船^{フョイル}で船路の風景を満喫した。

海峡を渡る

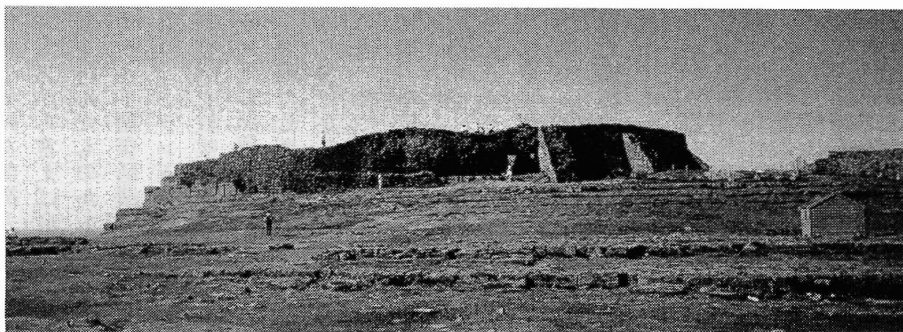
インターシテイの快速列車^{ディゼール}はロンドン・ユーストン駅を出て西に向って疾走を続ける。クルーから先、左手の突兀たる岩山はウェールズのカンブリアン山地^{マフンティン}の北面である。ごつ／＼と言う形容詞が相応しい。ケルト人はアングロサクソンによってこんな所に追ひこまれたのだ。人間も動物である以上それは止むを得まい。たゞし心の

中まで支配し得るだらうか。世界的ナショナルリズム復活の波に乗ってこのブリテン島にも少々な臭いものを感じる。こゝからは停る駅名の綴りが読めない。この辺はウェールズ、コーンウォール、ブルトン語の系統で、K音^wがP音に変化した所謂Pケルト語系のウェールズ語を話す。停車の度に同席の客に発音してもらう。Ilandudnoはスランドウドノー、Maachynllethはマキンスラス、ついでにカンブリアの語源Gymruはキムルーで同族の意味である。ウェールズ語復活論の先鋒S・ルイスの「ウェールズ語のないウェールズはウェールズではない。」の標語の下にTV放送局設立運動が起った。一九八二年にはTV局、S4Cがウェールズ語番組を週二十時間以上流すことになった。今は小学校にもウェールズ語の教科が入り、公用語にも必ずその使用が英語との選択で認められる権利を獲得したようだ。ウェールズ人に気力がなくならなければこの問題はブリテン島やアイルランド全体に波及し複雑なことになりそうだ。

アングレシー島のホーリーヘッドから大きな連絡船^{フライヤー}でアイルランドのロスラリー港に上陸、軽快な電車でタラ駅に着く。ここが生涯行けるとは夢想だにしかかったダブリンなのだ。万感盡きて頭は無力状態に近い。

翌朝こゝから列車で三時間、この国の西岸ゴルウェイに行く。その地名は「鷗の道」のケニングで「静か^ケの海」

の意味ではなからうか。ゴルウェイの岬からは中型のモーターボート。遙か西の沖に淡紫に霞む三つのアランの島々が浮かんでいる。その一つ、イニシモア島目指しボートは豪快に白波蹴立て、たちまち接近する。殺風景な灰色の岸壁に逸る心で足跡を印した。茜色の夕空が美しく島は一面シルエットになっていた。翌日、ケルトより古いもう一つの文化遺跡を訪ねて島の西に行く。ミニバスは狭い山道を伝って背を越える。石造の少し大きな廃屋は後世ケルト人の建てた教会跡だそう。近くには屋根の全くない切妻型の家の石組外壁がそっくり残っている。今でもそれらに棟木を通して再利用しているものもある。古生代の岩盤なので基礎が安定しているからだ。下車してから山路を徒歩で行く。両側にはフクシヤのピンク色の提灯花がたわゝについた灌木の繁みがしばらく続く。そのうち上り勾配の草の原となる。禾本科が岩道の間を埋めている。植物相は日本と全く同じ。靱草が紫の舌をちょん／＼と出し、木苺は赤と黒の実をつけ、風露草、蒲公英、車前草が目を見守る。踏みつけてゆく岩の何れも表面が平らなのは堆積岩のせいだ。板状節理だから割ればそのまゝ石材になる。頂上に目をむけると積石の壁が横たわっている。昔の後樂園の球場を連想する。雄大な眺めだ。辿り付くと石堀の一箇所に四角なくぐり門がある。行業の名所であろう。多勢の人々と行き交うが



アラン島の石の構築物

感心なことに知らぬ誰かが聲を掛けてくれる。道を教えあったり、ねぎらったり。幅五メートルの厚さの垣の内側は半円形の石垣に取り巻かれた容である。更にその中には小さな一メートル幅の環がある。壁の反対側は一直線の崖際。その先は海。縁から覗きたいが四ん這いでも行けそうにない。仕方なく腹這ひで際まで辿りつき下を覗く。見物客はからかって「もつと前／＼」とはやしている。二百メートルの懸崖の底には白い飛沫をあげる波頭の凸凹。足の爪先まで悪寒が走った。我慢して写真を二、三枚撮

る。一体古代人は何のためこの様なものを造ったのか、それは未だ人類にとって謎である。砦の筈がないとすれば祈りの場所としか言えまい。ことよつたら女陰ヨウニか子宮の形であるこの円型砦は前四〇〇〇年から三〇〇〇年位のものと見なされている。これはその頃中央アジアから西進してきたクルガン文化と、係わりがあると私は考えている。するとそれから約千年後にケルトが入って来たことになる。民族も文化の波も絶えず後からくおし寄せていたのであろう。

ケルトの遺蹟と伝説に満ちたアイルランドに思いを残しつつさらに旅を進める。

今に生きるスコットランド

向いの客が車窓を指してあれを見なさいと言う。つと窓外を見ると殆ど眞上に大きな城がのしかかるように立っている。エジンバラ城だ。程なくウエイヴァリー驛に到着。その驛名からウォールター スコットの小説を思い出す。やはりそうだったのだ。驛を出るとすぐ目の前にすくつと伸び上っている高い塔がスコット モニユメント。その根本に白いスコットの立像が見えた。これをこの地の後輩達が建てたことはスコットランド人にとつてもケルト人にとつても大層意味深い。彼らはケルトの伝統がイギリス文学の中で力強く生き、それと融和して新たな合金ブリニヤ（錫・アンチモン・銅・亜鉛）を作ったことに

民族の気持を象徴させたのであろう。ケルト民族主義の考え方から言えば自らの心の健在と異文化への侵出に快哉を叫んだものかも知れない。実際三つのケルト族の中でケルト語復活運動にその否決票が過半数を占めたのがスコットランドであつた。残る二つは今さかんにケルト語復活を鼓吹しているところである。たゞし何れの側もケルトの伝統を誇りにしている点では同じと考えられる。

翌朝の食事にヨーロッパ共通のミールである穀類シリアルがやはり出て来た。押大麦、小麦、燕麦、ライ麦、麦芽ザイムバレーイの他、松の実パイナツト、榛ヘイゼルナツト、日向葵サンフラワーシード、亚麻種リンゼード、干葡萄、干林檎、扁桃などを好みにより適宜混ぜ合はせて取るのだ。これに熱いミルクをかけて食べる。西洋人は何と原始的なんだらうと初めは笑っていた。これでは二万年前の狩猟採取時代のまゝではないか。ところである時農学の書物の中に栽培植物の記事を読んだ。それによれば命名された植物二十五万種のうち人間が作物としているのは世界中で二・三百種に過ぎないと言う。しかもその大部分は古代人が探し出したものばかりだそうだ。そう言えは日本で食べているものも同じだ。生食しているものも多い。東西の違いは食品の取り合はせ、調理法、盛り付け方にある。このシリアルも精製し、押潰してあり、それに相応しい器に盛ってある。考えれば刺身と同じ理屈だ。その上食前に祈っている客、感謝の言葉を口にする人も多

かった。明らかに餌を食っている動物ではない。太古から引き継いできた伝統に安心して従っているのだ。私は目をつむり二万年前のホモサピエンスに変身した積りになる。そしてこの押麦や木の実をミルクもかけずにぼりぼり噛んでたべた。旨くもない所がかえっておいしかった。帰国してからも紀之国屋で買って来て時々朝食にしている。

城と駅の間市内の通りはこの時期でもほどぐに賑かであった。観光客も多かった。商品はざっくりした手編みのセーターや毛織物、工芸品など手造りが多い。刺繍には本格的なものがあり、クイーンストリートの肖像画美術館には二百号位の大きさの見事な宗教刺繍画も飾られてあった。

スコットランドの神話はQケルト系のものである。その神話に出る領主ミエールの恋する娘エディンは魅惑的なヒロインでありこの地名の由来となった。エディン砦である。

Qケルトの神話はいくつかに分類される。一つはアルスター神話群で英雄達の武勇と美徳を讃えたもの。次は対照的なフィン神話群で庶民的狩猟物語であり、自然叙情の詩である。もう一つは歴史的なリャウル・ガウォーラなる侵攻の書とディンハナスクなる風土記地名考証だ。侵攻の書はキリスト教僧侶の十二世紀の編集によるので

キリスト教神話に摺り付けられた所もあるが修整解釈すれば神話学的資料としてインド・ヨーロッパ神話系につながる。

ウェールズにもPケルトとしてフランスのブリタニヤ神話と呼応するキュルークとオルウェン物語や四分枝篇がある。それはアーサー王ロマンスの素材としてヨーロッパ文学、芸術に発展している。

ネッシーよさらば

旅もこゝまで来ればロツホネスに行かざるを得ない。古いケルトのピクト族の據点である。鉄道でウェイバリーから三時間の行程。途中の駅グレンイーグルズはゴルフ発祥の地と隣席の客に教えられた。セント・アンドリュースも近い。窓外の原野には白く点々と羊がまるでばら蒔かれていくようだ。子供の時の記憶にある桑の葉をしいた青い蚕棚、その上で白い蚕が葉をたべているのと似た景色である。近くからは野兎が驚いてばら／＼と跳ねて逃げる。沿線の山毛櫨林からは仔鹿もとび出した。両側に迫る荒涼たる山膚は一面赤紫のヒースの花に敷き詰められている。美しいが沈んだ気分になる。

インヴァネス駅で下車。懐かしい名の町だ。昔我等の父親の時代、着物の上から羽織る二重回をインバネスコートと言ったものだ。怪盗ルパンもたしか着ていた。

早速ミニバスでネス湖行。寂しい山合ひを走ると横の

川が幅を増したと見る間にそれが細長い湖になる。姿から見て、氷河の名残りだ。茶店のある公園で下車。眺望抜群。

向ふ岸に薄青く横たわる山並は岩の箇所だけ白っぽく色を弾^{はじ}いている。その前に光を湛^{インディゴ}えて藍色^{ローホ}の湖が波もなく静かに拡がっている。これなら怪龍が一匹位いても様になるう。所がそれが居たのだ。すぐ左手の大きな池の中に。亀の姿で、その首を象の鼻のように長々と伸ばした六、七メートルもの巨大な怪物が浮んでいる。風が吹くとぐうっと向きを転ずる。記念に証據写真を一枚撮る。

インバネスに戻って雑貨屋で土産物を物色していた。



ピクト人 (ジョン・ホワイト画)

色々なパターンの型紙みたいなものが袋に入っている。不思議に思い店員にきくとそれは入墨^{インク}の用品とのこと。こゝはピクト族の故郷である。昔から彼らは全身に入墨するのでその名があるのだ。ローマ人によってこの名が付けられたと言う。案外そんな伝統が残っているのではなからうか。買って来れば連句の會の話題になったかも知れなかった。

夜のレストランではこゝまで抱いて来た執念を果すべく早速ハギスを注文する。当地名物なのだ。それから鹿^{ヴェニスン}のステーキと血^{ブレス}入りソーセージ。ヴェニスンの料理は日本と違い、さすがに臭がなく、軟かい。さてハギスは如何物であろうか。

But he choked upon the haggis bags, haggis

bags, haggis bags,

But he choked upon the haggis bags,

And that ended Willy Wood.

これはスコットランドのバラッドの一節だ。がつがつ食ってハギスの袋をのどに引っかけ、ウィリイ ウッドは死んだ。してみるとハギスはやはり下手物^{げて}。羊の肝臓、肺臓、心臓にオートミールと脂を混ぜ、羊の胃袋に入れて数時間煮込んだとコックが教えてくれた。チョリゾー・ソーセージともども塩気がやゝきつい。この日の料理には赤ワインが相応しい。これでこの度の旅行は充分満喫

できた。

さてケルト文化の経路を辿って来たがそれはイギリス文学への関わりを実感しなかったからである。英文学はアングロサクソンだけの文学ではなく、そこにケルトの伝統と才能が豊かさをもたらしていると考ええる。両文化は異なる経路を辿って来て再び混合したもののだが、元来は同じ神話系であるから他所からの文化より馴染みがよい。ケルト民族や言葉の復興運動はそれに意欲を燃やす人がやるべきであらう。しかしスコットランド人の大方の感覚のように自らの伝統と才能をイギリス文化の中に生かして新しいものを醸し出す行き方も好ましく思う。私の次回の旅行はゲルマン、ノースマンの民族移動の跡を訪ね、バルト三国からスウェーデン、ノルウェー、デンマーク方面の文化を経験してみたいと思う。五年前のラテン、アラビヤ、エジプトの旅行もイギリス文化の理解には大へん有益であった。究極には日本文化のルーツが如何に神話系を通して大陸の古代と係り、世界の人類が遠い昔に共通の話題を分かち合っていたのかを知りたいと考えている。

そしてこの記の擧句。

夢とうつつを蝶は舞ひをり

執筆

註

始原への旅だち 第四部 ジーン アウル

百々祐利子 評論社一九九三年版

ケルトの残照 堀 淳一 東京書籍 一九九二年

ケルト人 ゲルハルト・ヘルム著 関 楠生

訳 河出書房新社 一九九〇年